

# 「浄土真宗のみ教え」をいただいで

## 今、問われる人間の営み

4月15日の立教開宗記念法要において、専如ご門主がご親教の中で、親鸞聖人の教えの精髓を新たにまとめた「浄土真宗のみ教え」を示されました。新型コロナウイルス感染の蔓延が止まらない状況下でのこのお示しは特別な意義を有します。

いま全人類がコロナ禍という同じ課題に直面しています。コロナ禍はあらゆる局面に強い影響を及ぼし、私たちのいのちを脅かしています。地球的視野で現代社会をみつめるならば、コロナ禍をはじめとてあまりに多くの深刻な課題があることに気づきます。紛争、貧困、経済格差、気候変動など、いまや地球が危機的状況にあります。地球が悲鳴をあげているのです。決して大げさな表現ではありません。

人類の活動が地球のあり方を根本的に変えてしまったことで、近年「人新世（ひとしんせい）」という地質学の概念がさまざまな分野で使われるようになっていきます。新型コロナウイルスのパンデミックに見られるように、次々と数多くの危機事象が私たちの生活を脅かす、これが「人新世」の特徴です。

まさに今、人間の営みが問われているのです。人間の行き過ぎた自然開発や過剰なる二酸化炭素の排出が生態系に大きな影響を及ぼしています。人間の行為、人間の行動、これが問題を引き起こしているとするならば、誰にとっても他人事ではないはずで、人間存在そのものを厳しく問うまなざしが今や痛切に求められています。私たちが依りどころにすべきは、人間中心のものの方や自己中心性に基づく思考を促す人知ではなく、人知を超えたはたらきでなくてはなりません。その点からして、このたびのご門主のご親教は時

機に叶ったまことに意義深いものであります。

激動の鎌倉時代、親鸞聖人が人間のありようを根源的に問いかけ、まことの生き方を求められました。阿弥陀仏の誓願に出遇われ、誓願に照らされた「真実の生き方」を顕かにされたのです。いかに自分というものが至らない存在であるか、その至らぬ存在の自分に対し阿弥陀仏の智慧と慈悲の光が届いているという不思議。それは思議を超えた世界からのよび声、「南無阿弥陀仏」となって私たちに届いています。この思議を超えたはたらきかけこそが、常にわが身を省みて社会のために尽くす人格を形成させ、社会のさまざまな問題に果敢に立ち向かっていく念仏者の生き方を生み出すのです。

## み教えに遇って生き方が変わる

ご門主がお示しになられた「浄土真宗のみ教え」は前段に教えの根本が、後段には教えを依りどころに生きる者のありようが説かれています。私たちがどのように生きていくかが問われている今であればこそ、全身で受けとめねばなりません。私たちの日常と言えば、執われの心に支配され、生かされていることに対する感謝の念を忘れ、むさぼりやいかりといった負の感情に流されている。これが私たちの現実の姿です。どこまでいっても自己本位に生きていることに気づかされる教えに遇ってこそ、本物の救いの道が見えてきます。少しずつではありますが生き方が変わってくるのです。

穏やかな顔と優しい言葉（「和顔愛語」）をつねに心がけるだけでも生き方は変わってきます。他者へかける思いはよりよき社会構築の要です。親鸞聖人が「浄土真宗は大乗のなかの至極なり」と言われるように、

大乘仏教の根幹にある他者性を浄土真宗は有しています。

## 社会貢献活動とみ教え

近年、環境問題をはじめとして社会の課題に関心を寄せる若者が増えつつあります。弱い立場におかれた人に手を差し伸べる活動に積極的に関わろうとする学生の活動には目を見張るものがあります。そうした社会貢献活動と浄土真宗のみ教えとは実は親和性があるのです。各人の社会貢献活動は必ず「壁」にぶち当たり、悩みが生じてきます。「自分のやっている小さなことに意味があるのだろうか」と。親鸞聖人の深い人間観はそうした悩みを包み込みます。若者は問題に直面した時に、わが身を省みることで、その都度その都度、軌道修正を図りながら活動を進めていくことができるのです。龍谷総合学園に加盟する学校では今、仏教とSDGsを結び付けた「仏教SDGs」を展開し、各地域で注目を集めつつあります。自分たちに今できることを考える学びの輪が広がりつつあるのです。

喜びも悲しみも分かち合いながら、日々に精一杯つとめること。これを教育現場で実践することにより世の中の空気は変わっていくでありましょう。新しい世代が社会を動かしていくのです。

宗門人はご門主の思いを心に留め、自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現を目指してまいりましょう。



いりさわ たかし  
入澤 崇

龍谷大学学長  
龍谷総合学園理事長